

上智短期大学（現上智大学短期大学部）創立40周年に思う

上智学院理事長 高 祖 敏 明

本年（2013年）上智短期大学（現上智大学短期大学部）は創立40周年を祝った。1975年3月に卒業した第1期生は還暦を迎える年齢であり、その年以降、毎年250名余の卒業生を社会や4年制大学に送り出して、卒業生はいまや1万人を超えている。この間の発展をもたらされた先人、とりわけ教職員のご苦勞が偲ばれ、そのご尽力と献身には自然と頭が下がる思いである。同時に、学生たちの真摯な学び、卒業生たちの家庭や社会での活躍の数々、それを暖かく支えてくださった保護者の方々、さらに、本学を地域の一員として受け入れてくださり、交わりを深めてくださった秦野市当局と市民の皆様にご心より感謝を申し上げたい。

ここでは以下、思い出がたり風に上智短期大学と私自身とのかかわりを軸に振り返ってみる。

上智短期大学は1973年4月1日、緑の自然があふれる秦野キャンパス一北の正面に丹沢山塊を抱き、南には湘南の海を望み、西に富士山の偉容を仰ぐ高台一に、英語科単科の女子のみの短大として開学した。その数日前の3月27日、ドイツ・ケルン大司教ヨゼフ・ヘフナー枢機卿、ヴェーステンベルク駐日バチカン大使、地元秦野の関係者らの来賓を迎え、新校舎の竣工祝別式が挙行された。式中地震が起り、一同ヒヤッとしたが、当時の理事長ヨゼフ・ピタウ神父がとっさに「自信を持っていきましょう」と語り、思い出深い出発となったという。

2012年4月に上智大学短期大学部へと名称変更を行ったが、創立当時の教育理念は今日まで受け継がれている。初代学長はイエズス会のジェラルド・バリー神父、英語科長は上智大学の英文学科教授、巽豊彦教授であった。（この創立者を代表するお二人は、創立40周年記念式典の前と後に惜しくも相次いで逝去（巽名誉教授：2013年12月9日、バリー師：12月27日）された。ここに記して、そのご尽力に感謝をお捧げするとともに、そのご冥福を祈るものである。）

バリー初代学長は創立時に、入学した学生に向けて次のようなメッセージを送っている。

「本学の教育はキリスト教ヒューマニズムに基づくものであり、その上に徹底した専門分野の学びがあります。カトリシズムの精神を活かした人間形成を目指し、豊かな教養と円満な人格を備えた女性の育成が第一の目標です。第二の目標は、東西文化をつなぐ役割を果たせる女性の育成です。このほかに学生は英語で学びながら Language Spirit（言霊）を把握することが求められており、その努力を通じて学生は自己を発見し人間性を豊かにできるのです」と。

ここに描かれた①キリスト教ヒューマニズムに基づく教育、②英語力の体得、③国際性の育成、を実現しようとする教員スタッフも多彩であった。イエズス会神父の教員に加えて、聖マリア修道女会、聖心会、サンモール会のシスター方、そしておもに上智大学から移籍した教職員で構成され、国籍から見ても国際色豊かな人的環境が整えられた。本学の創設期から進展期に至るバリー学長時代は、日本経済の安定的成長、国際化の進展、女性の短大志向の高まりなどを追い風に、上智大学の系列校という強みも発揮して、しっかりとした基礎を打ち立てることに努めた時期であった。そのおかげで上智短期大学は、神奈川県中部・西部、静岡県東部にしっかりと根を張ることができ、同時に、短大としては珍しく、北は北海道、南は九州・沖縄から受験生が集まる「全国区」の短大としての足場を築くことができた。

そうした中で1977年に、学生の課外活動 Sophia English Association が主催する「上智短期大学学長杯英語スピーチコンテスト」が始まった。以来、上智大学をはじめとする他大学の学生たちとともに我が短期大学の学生も毎年コンテストに挑み、これまで多くの学生が四年制大学の学生と肩を並べて入賞を果たしてきた。1982年には秦野の地域の人々への公開講座が開設され、今日にいたるまでコミュニティ・カレッジとして親しまれ、多くの受講生が秦野キャンパスに足を運んでいる。

1985年4月、二代学長としてイエズス会員ダニエル・コリンズ神父が就任。三代学長はイエズス会員ハイメ・カスタニエダ神父が1998年4月より2期6年にわたって務められ、献身的な教授陣や事務スタッフと力を合わせて、上智短期大学がキリスト教精神に基づいて目指す「他者のために、他者とともに生きる女性 (Women for Others, with Others)」を育てる教育が、脈々と受け継がれてきた。

そうした成果が評価され、嬉しいことに、バリー元学長（2006年秋の叙勲）、カスタニエダ元学長（2010年秋の叙勲）に続き、今年の文化の日の秋の叙勲で、コリンズ元学長が瑞宝中綬章を受賞された。先生は自ら教壇に立って、学生たちが国際社会に適切に発信できる力を身につけるよう指導される一方、本学が地域社会に根付くことが大切と考えられた。そこで、クリスマスの時期には自慢の髭を活用し、秦野市内の幼稚園、保育園にサンタクロース姿に扮して訪問するなど、当時外国人と触れ合う機会の少なかった園児や児童の教育現場において、英語への関心や国際化への芽を育てようとした。さらに現在、市内の公民館などを拠点に活動している外国籍市民への日本語・教科学習支援のコミュニティフレンドは、当時「家庭教師ボランティア」と呼ばれており、この支援活動がスタートしたのもコリンズ学長時代であった。

コリンズ学長時代の終盤からカスタニエダ学長時代にかけては、情報通信技術革命やグローバル化が進行して生活スタイルや求められる働き方が変化する一方、バブルがはじける、日本経済が停滞する、政権が安定を欠く、18歳人口が減少に転じる、女性の高学歴志向と社会進出が進む、従来の家庭や社会における性別役割分業が崩れ変容する、などの社会の構

造的变化が高等教育機関に強い影響を及ぼすようになった時期であった。とりわけ短期大学はその直撃を受けるかたちとなり、女性の育成をめぐる社会思潮も、知性と教養をほどほどに磨き、よき家庭人におさまる女性像から、社会でのキャリアと家庭での仕事を両立させる女性像を求める方向へと移り変わって行った。上智短期大学も、「全国区」の特徴は残しながらも志願者の減少に苦しむことになったのである。

こうした社会のニーズの変化、短期大学の位置づけの変化、志願者の動向と受験地区の変化に対して、危機感を強めた教職員が結束し、カスタニエダ学長時代からカリキュラム改編をはじめとする教育改革の案がいろいろと模索され、練られていった。そして、それらの案が実行に移され、一定の成果を上げたのは、私が上智学院理事長と兼務で四代学長（2003年4月～2009年3月）を務めた時期であった。

改革の柱は、創立以来の教育理念をさらに深め、Women for Others, with Others の育成にさらに力を注ぐため、①学生一人ひとりの学習活動・学園生活・進路選択に教職員がこれまで以上に寄り添うこと、②そのためにカリキュラム改革を進めること、③これらを実行するために教員の研究力と教育力を高めること、④これらにより上智短期大学の魅力を高め、地域や高校との連携をこれまで以上に強め、併せて入試改革を進めること、などであった。実際に試みられた事例は、たとえば次のようである。

まず2003年度には、海外短期語学講座が開設され、夏期休暇中に48名の学生がアメリカのペンシルヴァニア大学、カリフォルニア州立大学パークレー校、カナダのマギル大学で英語プログラムを受講した。また、近隣の保育園などでは、学生による児童英語教育ボランティア活動がスタートした。

他方この年は、本学が創立30周年を迎えた節目の年であった。開学時の理事長ヨゼフ・ピタウ大司教をお迎えしての記念の集いでは、「秦野キャンパスを舞台にした学生歌を」との呼びかけで募集された入選作の発表があり、当時の2年次生高橋明日香さんと教員の近藤佐智子先生の歌詞が優秀賞として選ばれた。これらは、ともに作曲家の浅香満氏が曲をつけてくださり、年度を結ぶ卒業式で初めて披露された。

2004年度にはカリキュラムの全面改訂が行われ、これまでクラス単位で行われてきた必修英語科目を削減し、学生の習熟度と進路など本人のニーズにあわせて自由に選択できる英語科目を大幅に増やした。同時に、学生の過重負担を避け、通年制に比べて半減した適度の科目を集中して学べるようにと、セメスター制へと移行した。月曜と木曜、火曜と金曜はそれぞれまったく同じ時間割で授業が組まれ、一つの科目は週2回の授業を実施する体制を整えた。さらに、入学から卒業までの四学期を準備期、発展期、応用期、完成期と位置づけ、学生ひとり一人の指導を教員各自が責任をもって行えるよう、少人数のゼミナールも二年次生を対象に導入された。加えて、社会のいろいろな分野で活躍する卒業生たちが順次キャンパスに戻り、後輩たちに自らの歩んできた道を話して聞かせる同窓会寄附講座「キャリア・

プランニング講座」が開始されたのもこの年の秋学期であった。なお、この寄附講座は現在も継続されている。

このような教育改革の進行にさらに拍車をかけたのは、文部科学省の特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）に本学の「地域の外国籍市民への学習支援活動の推進－学生主体の家庭教師ボランティアの展開モデル」が採択されたことであった。「家庭教師ボランティア」は、1988年に学生と聖マリア修道女会の有志教員が「インドシナ難民の学習支援」をしようと立ち上げた地域の外国籍市民への支援活動で、本学の教育理念と地域の教育ニーズに応える活動として、在学生の20%が参加する本学でも最大の課外活動へと発展していた。申請当時で延べ930名の学生がボランティア活動に参加しており、支援した外国籍市民は635名を数えた。この支援プログラムは、本学のキリスト教ヒューマニズム、国際性、言語教育という理念を、学生たちが実践を交えて学ぶ点が高く評価された。これを受け、特色GP採択記念連続講演を2004年10月、11月、2005年3月に秦野キャンパスで開催し、同時に、卒業生の「家庭教師ボランティア」体験者を対象にしてアンケート調査を実施、その結果は上智短期大学の紀要に公表された。

一方、前年に始まった児童英語ボランティアと関連を持たせた児童英語教育の科目も開講された。これにより、地域社会の外国籍児童や市民の方々への日本語支援ボランティアと、地域の子どもたちを対象とした児童英語教育ボランティアという、本学のボランティア活動のふたつの柱が立てられた。

2005年度も引き続きカリキュラムの改訂がすすめられ、専門科目は「異文化理解コース」「言語学コース」「英米文学コース」「児童英語教育コース」の四つのコースで組み合わさることになった。学生は、複数のコースから自由に科目を選択履修することもできるし、自らの進路や興味関心に応じて一つのコース科目を定められた単位分履修すれば、卒業時に当該のコース修了書が得られるようになった。

2006年度には、正課の英語科目を補完することが試みられ、All English Day, English Bulletin Board, English Café Luncheonなどが始められた。学生たちの積極的な参画もあり、以降、形を変えながらも恒例の行事となっていった。地域連携では、コミュニティ・カレッジが中心となり、秦野市教育委員会の協力を得て、海外の講師による特別講演会「カンボジアの文化に触れる」を9月に秦野市文化会館で開催した。それが一つのきっかけとなって、次の年、秦野市との間で連携協定が結ばれることとなった。こうした中で2005年度と2006年度とを対象に上智短期大学全体の自己点検・評価を実施し、翌年（2007）度に財団法人短期大学基準協会による第三者評価を受けることとした。

2007年度には、上述の「秦野市・上智短期大学提携事業」協定が10月の大学祭（SJ祭）初日に秦野キャンパスで締結され、「家庭教師ボランティア」「児童英語ボランティア」などの学生ボランティア活動を通して地域との連携を深めていくこととなった。このような学生たちの各方面での活躍を受けて、同年には学長賞を創設し、学業ばかりでなく、スポーツや

ボランティア活動などの課外活動などで著しい成果をあげた学生を顕彰することにした。また、この年に本学は上記の短期大学基準協会の認証評価を受け、協会の定める全ての領域において基準を満たしているとして、2008年3月21日付で「適格」と認定された。

2008年度には、これまでの改革の試みの成果を統合して高めるため、文部科学省の新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）に挑戦した。その結果、幸いにも本学の「サービラーニングによる学生支援の総合化—ライフデザインと社会人基礎力の養成」が採択された。これは、2004年に特色 GP で採択された「家庭教師ボランティア」を、地域の公立小中学校および放課後の児童館などでの「日本語・教科支援ボランティア」へと発展させ、これと「児童英語教育ボランティア」などの「学外の学び」と、カリキュラム上の「学内での学び」とを内容的にも関連付け、これをサービラーニングとして位置づけたものであった。地域社会のニーズと学生のニーズを結びつけたこれらの活動を通して、学生の修学支援と進路決定支援を行っている点が高く評価された。

なお、これらのボランティア活動は秦野市教育委員会との提携事業として、学校現場での支援学生は「カレッジフレンド」、放課後の児童館などでの支援学生は「コミュニティフレンド」、公立小学校での英語教育ボランティア学生は「イングリッシュフレンド」との名称をいただき、秦野市より交通費の支援を受けて実施されるようになった。こうした活動をこれまで以上に支えるために、この年、キャンパス内のソフィアホール 2 階にサービラーニングセンター（SL センター）を開設した。このセンターには学生ラウンジとリソース室があり、学生たちがコーディネーター、チューター、教職員の支援を受けながら活動を行う拠点とした。また、経済的な学生支援の充実をはかるため、2009年2月に実施した入学試験から上智短期大学創立 40 周年記念特待生奨学金が新たに設けられた。

2009年4月に、イエズス会員フランク・スコット・ハウエル神父が五代学長に就任した。この年には、サービラーニング活動を活用して、総合的な学生支援体制の確立が図られた。具体的には、学生の相談や個別指導に生かすために、学生一人ひとりの履修・進路・課外活動などの多面的な情報を一元化した「学生カルテ」を作成し、これを活用する仕組みが立ち上げられた。他方、キャンパスのセキュリティを強化するため正門守衛所と非常警報装置を設置し、警備員が常駐・巡回する体制が整えられた。カリキュラム関係では、2 年次生必修のゼミナールに加えて 1 年次秋学期の必修科目としてプレゼミナールが導入され、早まる就職活動や編入学に向けたキャリア指導を、1 年次後半から各ゼミ担当教員が担うようになった。2010年2月には、学生支援 GP 採択後の成果として、GP フォーラム「サービラーニングによる学生支援の総合化—現在までの取り組み状況とこれからの課題—」が SL センターで開催された。

その後もさまざまな改革が行われ、嬉しいこともたくさんあった一方で、悲しい出来事にも見舞われた。とりわけ 2011年3月11日の東日本大震災の影響は大きく、被災地を中心

に多くの方々が亡くなられ、負傷し、あるいは家や故郷を失い、本学の3月入試も実施が不可能となってしまった。その痛手は大きく、2012年度入学生は初めて定員を割る事態となった。しかし、必要な支援に向けた動きも早く、創立40周年のための寄付金の募集項目に、震災被災地学生への支援を加え、現在では激甚災害に指定された地域の学生たちを対象とした奨学金が設定されている。また、ハウエル学長が2012年7月18日に病気のため急逝されるという悲劇もあった。

その一方で、記念すべき本年（2013年）の12月21日、創立40周年記念式典と記念の多文化共生シンポジウム「外国籍の子どもたちをエンパワーするために」が好天のもと、250名もの参加者を得て家族的な雰囲気の中で執り行われた。学生や保護者、秦野市をはじめ地域の支援者の参加もあり、これまでの歩みを改めて確認するとともに、これから歩む方向を深く考える機会となった。その一端は、この紀要でも紹介される手はずである。

本年は、上智短期大学（上智大学短期大学部）にとっても上智学院にとっても節目の年であった。この40年の間、いや小論が目をついた21世紀初頭の6年に限っても、短期大学を取り巻く環境は大きく変化し、女子教育に求められるものも変わって来た。本年の『上智短期大学部紀要 創立40周年記念号』は、そうした40年の動向を教育面や研究活動の面から総括してみようとの趣旨で編集されている。少子高齢化の進行や高等教育および女子教育をめぐる社会環境の変化からみれば、短期大学全体も、私どもの上智大学短期大学部の将来も決して楽観できる展望が見出せているわけではない。しかし、これまでの40年間も決して平坦な道のりではなかったものを、教職員一同が力を合わせて乗り越えてきた。この号には、山本浩学長をはじめ、現在本短期大学部に在職している全専任教員が寄稿している。これらの論稿から、本学の来し方をよりよく知り、未来への可能性と方向性を考える素材を読みとっていただければ幸いである。